



ほつとするね
緑の府中

指導室 だより

第 75 号

編集・発行 府中市教育委員会教育部指導室
〒183-8703 府中市宮西町2-24
電話 042-335-4063

第14回府中市小・中学生の人権作文発表会

守ろう人権！

生かそう！

十代の声

第14回府中市小・中学生の人権作文発表会が、12月6日(日)府中の森芸術劇場「ふるさとホール」で行われ、大勢の保護者、市民、各種団体の方が参加した。

始めに、野口忠直市長より、「府中市では、未来を担う子どもたちに人権についての関心を高めてもらうために様々な機会を設けて人権尊重の大切さを考えていただいています。その一つとしてこの人権作文発表会を行っています。そして、発表会を通して、改めて人権の尊さに

ついて考え、今後の生活の中に役立てていってほしいと思います。」との挨拶があった。

また、小・中学生の作文発表後の「大人からのメッセージ」では、人権作文発表会実行委員会副委員長・府中市立府中第一中学校堀米孝尚校長より、「今日の発表会を命の大切さを考えるきっかけにしてほしい」とのメッセージがあった。



「生きて」
府中市立府中第四中学校
二年生 北原侑樹さん

小学三年生の夏休み。長崎の祖父の家へ行った。毎年楽しみにしている年中行事の一つで、祖父母に会うのは勿論、海などの自然に囲まれた母の実家で遊ぶのが何より楽しかった。しかし、その年は少し違った。「おじいちゃん、来たよ。」
「おお、よう来たな。」



「生きて」といっても通りの出迎える声。しかし、玄関先にいつも迎えに来ていた祖父の姿はそこにはなかった。玄関を上がり居間に入ると、やせ細った祖父の姿があった。祖父は僕や母達に元気な姿を見せようとしているのか、ソファーから、ゆっくり起き上がろうとしている所だった。祖父が脳梗そくて倒れたのは、僕が小学二年生の時の冬だった。辛い命を落とすことはなかったが、右脳の血管が詰まったため、左側が不自由になった。遠いこともあり、僕はお見舞いに行くこともなく、この夏が、祖父が倒れて初めて会う夏休みとなった。

僕の祖父は昭和十年生まれ。身長百八センチ、体重は九十キロという体格の良きで、よく

笑う元気なおじいちゃんだった。畑や田んぼもあったので、トラクターに乗っている姿や消毒に出かける姿が祖父の印象だった。「おじいちゃんやせたらうが。」と祖父が言った。
「本当やせてちょうど良かね。」と母が笑いながら答えていた。僕は一回り小さくなった祖父に驚いた。そして起き上がろうとしている姿を見て、聞いていた通り左側が不自由そうだなと思った。

「おじいちゃんの手はこんだけしか動かん」とい。」「
と言ってみせてくれた。着がえをするのも一人では転ぶこともあるので祖母が手伝っていた。ゆっくりと立ち上がり左足を引きずりながら歩く姿は、以前の祖父とは明らかに違っていた。しかし僕にとって祖父は祖父であり何も変わらなかつた。
「こんなじいちゃん、おかしかろうが。」
と祖父はしきりに自分の様子を気にしていた。

長崎へ行った時、よく早起きをして祖父といっしょに散歩していたのを覚えている。途中海が見える絶景のコースだ。
祖父はリハビリを続けていた。その年は無理でも、もしかしたら来年はまたいっしょに散歩できるのかなと思っていた。

そして今年の夏、僕は中学二年生になったが、あいかわらず、長崎へ行くのは楽しみだった。あれから二年後の冬、もう一度脳梗そくになった祖父は、更に不自由になる事も懸念されたが、幸い命に別条もなかったし僕から見れば祖父は年々良くなっていく気がした。しかし、全く以前と同じという訳にはいかず、農作業はやらなくなったり、大好きだった車もほとんど乗らなくなっていた。祖父はいつも寝てばかりいた。そんな祖父を見かねたのか、

「少しは運動した方がいいよ。」と母が促し、久しぶりに祖父と散歩に行くことにした。中二になった僕にとって、散歩三十分コースはもうマラソンコースになっていた。しかし祖父が心配だったので一緒に歩いていった。

「良かけん、先に行け。」と祖父が言った。僕は一人で原城を一周し、そしてまだ家から百メートルくらいの所で再び祖父に会った。足が不自由な祖父にとって、精一杯の距離だったのだと思う。

「足の上がらんとたい。みっともなかけん、もう帰ろうで。」と祖父は言った。僕は、はっとした。祖父の気持ちを知った。祖父は倒れる前の自分と比べて、明

らかに今の自分を卑下している様だった。体が大きくて、トラクターを自在に動かす祖父の姿は、傲慢ではあったが、今の祖父を恥ずかしいなど思った事は、一度もない。どんな姿になっても僕にとって祖父は祖父であり、祖母や母にとってもかけがえのない家族である。

倒れて以来、よく祖父は「倒れたまま死んでしまった方がよかった。」と言っていたらしい。

自らの命を絶つことを考えるのは人間だけであり、あらゆる生物にとって「生きる」とは本能である。死んだ方が良いなんて事は決してないと僕は思う。

帰省中に、親せきの赤ちゃんを抱く祖父の姿を見た。大きい祖父のあぐらの中に、スポンと納まった赤ちゃんを、目を細めてあやしている祖父を見て安心した。少し気弱になった祖父は、時々自らを否定するような事を言うけれど、新しい命の存在に喜びを感じている祖父の姿が本来の姿であり、「生きていく」と感じたからだ。僕は祖父には何もする事も出来ないけれど、毎年必ず言う言葉がある。

「また来るからね。」

これが僕から祖父への精一杯のメッセージなのである。

第14回 府中市小・中学生の人権作文発表会発表者一覧

発表順	学校名	学年	発表者	題名
1	府中第五中学校	2年	太田 祐希	ぼくは負けない
2	府中第七小学校	4年	田中 真結子	「おばあちゃんの笑顔」
3	府中第五中学校	3年	加藤 真由	平和に生きる私たち
4	若松小学校	5年	大室 翔	「ルール」
5	府中第三中学校	1年	野村 和	カンボジアで
6	府中第一中学校	3年	遠藤 直美	大好きな祖母から学んだ事
7	府中第九小学校	6年	佐々木 亜利	十人十色の世の中は
8	府中第十中学校	2年	飯田 麻友美	道
9	白糸台小学校	5年	保谷 萌木	心からあやまること
10	府中第二中学校	3年	矢田 愛香	必要なバリアフリーとは
11	府中第五小学校	6年	山崎 心美	初めて見た出産を通して、決めたこと
12	若松小学校	3年	高橋 真実	ゆめをもとう
13	府中第七中学校	3年	葛西 志優	思いやりへの一歩
14	住吉小学校	5年	川村 祐里	弟を通して感じる事
15	府中第九中学校	1年	渡邊 浩邦	祖母が教えてくれたこと
16	住吉小学校	5年	川中子 路人	人は変わる
17	明星中学校	3年	小野 瑞季	まだ見ぬ未来へ
18	府中第八小学校	6年	榊原 凪	私達にもできること
19	府中第八中学校	2年	山田 優梨乃	いじめる人、いじめられる人、周りの人
20	府中第一小学校	5年	佐々木 琴音	世の中には色々な人がいる
21	府中第四中学校	2年	北原 侑樹	「生きて」
22	府中第六小学校	6年	泉山 涼子	差別をなおす薬
23	府中第二小学校	5年	野田 奎裕	「どんなに つらくても 生きる」
24	浅間中学校	3年	松嶋 壘	『残っているのはしあわせの涙だけ』



生きる力を育む

「き・す・げ」

―本校の教育実践―

府中市立浅間中学校

校長 藤井 幸夫

① き 気づかう心

本校は昭和57年創立の市内では一番新しい中学校である。地域ではムサシノキスゲの浅間山、くらやみ祭りの大國魂神社に代表されるように、古くからの自然や伝統文化が息づく地域の中学校でもある。社会が大きく変化の中で、この息づく伝統を大切にしながらも、新しい社会を担う人材の育成が本校の教育に課せられている。それは、府中市学校教育プラン21が示す『誇りをもてるふるさと府中を創り、世界に活躍する府中っ子を育てる』ことでもある。本校はこれまで築きあげてきた校風を大切にしながら、新しい学習指導要領が示す「生きる力」の育成を念頭に置き、より「気づかう心、すすんで行動する態度、現実を見つめる力」の育成を教育スローガンとして掲げている。これらを重視した教育活動を、保護者・地域の方々の理解・協力を得ながら、以下のように実践している。

② す すすんで 行動する態度

生徒たちは人の中で育ち生活し次代を担っていく。一人一人を認め尊重することからよりよい協力・共生が進められる。それゆえ気づかう心は最も大切にしたいものである。本校では誰にでも挨拶できる学校を目指し、伝統としている。挨拶はコミュニケーションの始まり、生徒の挨拶に来校者からお褒めをいただき、下級生も上級生の姿をみて学んでいく。

生きる力としての確かな学力、豊かな心、逞しい身体は進んで行動する態度なくして充実は難しい。一つ一つが充実感、達成感のある生活を送るとともに期待や励ましの声が伝わることで一人一人の自己肯定感を高め自信に繋がる。このことが新しいチャレンジになると確信する。できるだけ多く日々の活動の中で一人一人の興味関心を高め、活躍できる場面を設定した授業や行事等を実践している。

③ け 現実を見つめる力

も地域社会への貢献となり、自己肯定感・有用感を醸成している。学校の授業や培った学力は単なる知識の集合体であってはならない。毎日の生活の中で生かされ、生活に生かす知恵にならなければ意味がないと考える。例えばルールを理解してもすぐにはゲームができないスポーツと同じである。また、学んだ事が現実の中でどう関わっているのか、理解したり考える事ができる確かな学力を育みたい。チョークと黒板だけの授業からICTを活用したり、専門の方や地域の方々、ゲストティーチャーを招いての授業、調べ学習や実際の見学、職場体験など教室を飛び出している学習で現実を見つめる力を培っている。

豊かな人間関係を築く

ある。相手を尊重し相手の意見を聞ける態度や自分の考えをまとめ、適切に相手に伝える力を醸成し、様々な人との関わり合いを体験させる事が求められている。朝読書や作文活動、調べ学習や発表など、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力を高めていく言語活動をより多く実践していく必要がある。一方ではストレス社会に生き抜くための知識や技能を重視したい。

これらの課題は学校、保護者、地域の連携なくして効果は期待できない。三者には境目は無く、互いに理解しできるところから進めたい。それは大人が責任ある態度を示していくことに他ならない。幸い、本校には理解・協力する保護者PTA、学校を見守り支える青少年対をはじめとする地域の方々、そして努力を惜しまない教職員の連携がある。地域社会の期待に応えるべくよりよい府中っ子の育成にさらに努力していきたい。



府中市教育委員会研究協力校研究発表報告

感じ・考え・創造する子の育成

「思考力を育てる国語科指導の工夫」

～書く活動を通して～

府中市立府中第一小学校

研究主任 渡部アヤ子

◆研究主題

本校では、平成20・21年度の府中市教育委員会研究協力校として、研究主題を『感じ・考え・創造する子の育成』とし、研究副主題を『思考力を育てる国語科指導の工夫～書く活動を通して～』として、研究を進めてきた。

◆研究の方法

学習過程に「書く活動」を意図的に位置付け、児童の発達段階にあった思考法を絞り込んで実践することにより、筋道立てて考える力、論理的思考力が身に付くであろうと考えた。深く思考させるためには、目的や意図をはっきりもたせて、

「書く活動」を取り入れることが大切であり、文字言語として表現することは、音声言語より時間をかけて思考し、書いたものを振り返ることで、また更に思考すると考えたからである。何をどのような方法で、何をいつ考えるのかを明確にして、学習内容に取り組みさせていけば、児童は真剣に考えるようになると思えた。

◆研究の実践
次の三つの観点から、授業研究の充実を図った。
第一は、指導計画の工夫である。ねらいに迫れるような学習の展開を考え、多様な教材を取り入れ、じっくり考える時間を取った。その際、指導計画の中に、思考力を育てる場面を意図的に位置付けるようにした。

◆研究の成果と課題
【研究の成果】
一点目は、活用型授業と他教材の工夫である。同じ文章構成の他教材を活用し、繰り返し学習することは、思考法の定着を図る上で、とても効果的であった。自信をもって発言したり、書いたりする児童の姿が見られるようになってきた。

◆研究発表
全学年2学級ずつ授業を公開した。当日授業のない学級が先行授業を行うことで、発問や板書計画などをしっかりと検討することができた。改めて授業の見直しをもつシミュレーションの大切さを実感した。



府中市教育委員会研究協力校研究発表報告

豊かなかかわり合いの中で、自主的に活動する児童の育成

～学級活動を中心にして～

府中市立日新小学校
研究主任 伊東 由美

◆研究主題と
主題設定の理由

平成20・21年度の2年間「豊かなかかわり合いの中で、自主的に活動する児童の育成」学級活動を中心にして」という研究主題で府中市教育委員会研究協力校として、研究に取り組んだ。

この研究主題は、その前年度までの国語科の研究で残された課題や、児童の実態から検討し、決定したものである。児童は、自分の考えを伝える力を付けて来ていたが、さらに、互いの考えを出し合い、話し合いを通して考えを深め、よりよい解決につなげる力や、自分から進んでやりたいことを見付け、実践しようとする積極性や自主性、人によりよくかわり合う力などを付けさせたいと考えた。特別活

動、とりわけ学級活動は、このような力を付けることにつながる領域である。また、私たち教員自身に、もっと特別活動を知りたいという強い願いがあったことも、学級活動に取り組むことになった大きな理由であった。

◆研究の実践

まず、学習指導要領解説書特別活動編を読み合い、多くの講師の先生方に教えをいただいた。その中で、学級活動共通事項(1)の発達の段階による指導のポイントを「導く(低学年)・寄り添う(中学年)・見守る(高学年)」というキーワードにまとめ、児童が自主的に活動する力を付けていくための手だてを取るようにした。

低学年では、学級活動共通事項(1)学級会に楽しく、意欲的に取り組むことができるように、



六年生 学級会

一単位時間の中で話し合っ

めたことを直ぐに実行する工夫や学級会グッズの工夫を取り入れた。中学年では、計画委員会を一週間のサイクルの中に組み入れ、自主的に活動することができるようにした。高学年では、自分たちの生活の中の問題をとらえて議題につなげられるように、オリエンテーションや学級活動共通事項(2)との関連を図りながら進めた。

どの学年でも共通して、学級活動にかかわる掲示物を工夫し、学級会コーナーをつくるなど、日常の教室環境を整えることで、学級の取り組みや自分たちの成長を喜び合うことができるよう手だてをとった。また、朝の

「チャレンジタイム」に学級の時間を設定するなど、児童の自主的な活動の時間を確保する工夫も必要になっていった。特別活動の全体計画や学級活動の年間指導計画も見直し、全校で実践している。

◆研究発表

研究発表にあたっては、府中市立小中学校教育研究会「特別活動部会」から、武蔵台小学校の浅尾文主任教諭をコーディネーターとしてお迎えし、浅尾主任教諭からの質問に答える形で研究を発表することができた。また、今年度、丁寧な指導を頂いた 國學院大学教授 宮川八岐先生には、「特別活動で学校・教師が変わる」集団活動を生かす学校力・教師力」を演題にご講演いただいた。

◆成果と課題

この研究を通して、児童は少しずつ、自分とは異なる考えも尊重し、話し合いを通して考えを深めながら、集団で一つの考えにまとめる力を付けてきた。また、私たち自身がわずかではあるが、特別活動への理解を深めることができた。児童の実態を踏まえ、学級集団のかかわり合

いを大切にして、発達の段階に応じた手だてをとり学級活動に取り組むことで、児童一人一人や学級全体が変わっていく手応えを感じることができた。また、一人一人の児童や学級ばかりでなく、代表委員会や委員会活動、クラブ活動、たてわり班活動などでも、自主的に活動するようになってきたことも大きな成果である。特別活動の研究は、まだ、始めたばかりという感もある。ここで研究して得たことを、今後も継続して実践することで、児童に確かな力となって定着していくと考えている。



パネルディスカッションの手法による研究発表

道徳授業地区公開講座(2月)

- ◆2月16日(火)
 - ☆府中第六小学校 8時50分
 - 講演「和太鼓に魅せられて」
 - 和太鼓奏者 大塚宝氏
 - ◆2月17日(水)
 - ☆府中第四小学校 11時30分
 - 講演「子供の情報モラルの向上」NTTドコモ 企画総務部 主査 加納誠司氏
 - ☆日新小学校 13時45分
 - 講演「ケータイ安全教室」NTTドコモ「ケータイ安全教室」事務局
- ◆2月18日(木)
 - ☆府中第三小学校 8時35分
 - 講演「ふるさと府中を見つめよう」郷土の森博物館 学芸員 馬場治子氏
 - ☆新町小学校 13時45分
 - 講演「命について考える」日本児童文学者協会会員 今西乃子氏
- ◆2月19日(金)
 - ☆住吉小学校 13時30分
 - 講演「江戸庶民の子育てとして」NPO法人 大江戸文化振興ネットワーク 理事長 伊東萬里子氏
 - ◆2月20日(土)
 - ☆南白糸台小学校 8時40分
 - 講演「みんなの子どもをみんなで育てる」元全国小学校道徳教育研究会会長 萩原武雄氏

2月研修会・委員会等予定	日	曜	研修会・委員会等	会場	研修内容等
	1	月	生活指導主任会	教育センター	全体会、分科会
	8	月	特別支援学級代表者会	教育センター	全体会、分科会
	8	月	算数・数学指導員研修	教育センター	講義、演習
	12	金	人権教育推進委員会	教育センター	全体会、分科会
	16	火	初任者等研修	教育センター	全体会
	25	木	ICT活用推進委員会	教育センター	今年度のまとめ
	26	金	小学校英語活動推進委員会	教育センター	来年度に向けての課題検討

学びの窓

府中市郷土の森博物館

「特別展 発掘！府中の遺跡」

国府はいつできたか&調査速報 平成22年3月7日(日)まで

文化振興課文化財係 西野善勝 市では埋蔵文化財の活用として、遺跡の見学施設を設けた国史跡武蔵国府跡を公開している。

しかし、武蔵国府の具体像については、たとえばその範囲や運営の開始時期など、究明すべき課題が多く残されている。

現在も解明に向けて調査・研究は続けられており、日々新しい所見が得られている。

これらの成果については、随時刊行の発掘調査報告書等で公開しているところだが、出土品等を直接市民に公開する場として、府中市郷土の森博物館と協力して、毎年、特別展を開催している。今回の展示テーマは武蔵国府のはじまりについて、役所とマチの両面から考える試みであり、出土資料と現時点での見解を紹介する。

また旧石器・縄文・古墳時代や鎌倉時代以後の時代のものも含めて、平成20年度に市内で発掘・発見された遺構写真および遺物等を展示する。

これらの資料の公開をするこ

とで、府中市の歴史を市民がより身近に感じてもらえることができれば幸いである。



昨年12月末に、国連気候変動枠組み条約第15回締約国会議(COP15)が7、19日、コペンハーゲンで開催された。目的は、京都議定書に定めのない13年以降の国際的な温暖化対策で合意することであった。会議の内容を伝える連日の報道等では、環境破壊が深刻な国々からの訴えや願いは裏腹に、各国の経済状況を含めた様々な思惑が対立し具体的な手だてが見えない状況である。

もう一つの地球...

しかし、報道を通して知ることができた、海面上昇による国土の水没、干ばつによる深刻な水・食料不足などは、一人一人の心に届くメッセージであった。今、ここで、現実に行っている環境への負荷を減らすことは、個人レベルで改善を図ることができることである。車を乗ることを控えたり、節電を心がけたりすることなど枚挙にいとまがない。府中市教育委員会では、平成21年度から、環境エコプロジェクト33事業を展開し、「ゴミを減らす」「緑を増やす」「CO2を削減する」「環境問題を考える」の4つの活動を通して、環境問題を考える視点を育成するとともに、子どもたち自身が、自己の生活を見つめ直す機会と考えている。環境教育は、グローバルな視野を必要とし、この実践により「世界にはばたく府中っ子」の土台となる感性を培いたい。地球規模の環境破壊を憂慮したあるナチュラルリストの言葉として「一つの生きもののが息をひきとってしまえば、そのような生きものがもう一度生まれてくるためには、もう一つの宇宙ともう一つの地球が生成し発展しなければならぬ」と語っている。子どもたち自身が、地球規模の変化を毎日の生活の中で感じ取る感性を磨き、広く環境についての関心と理解を深めるよう指導を進める。(統括指導主事 金子 真吾)

